中　開

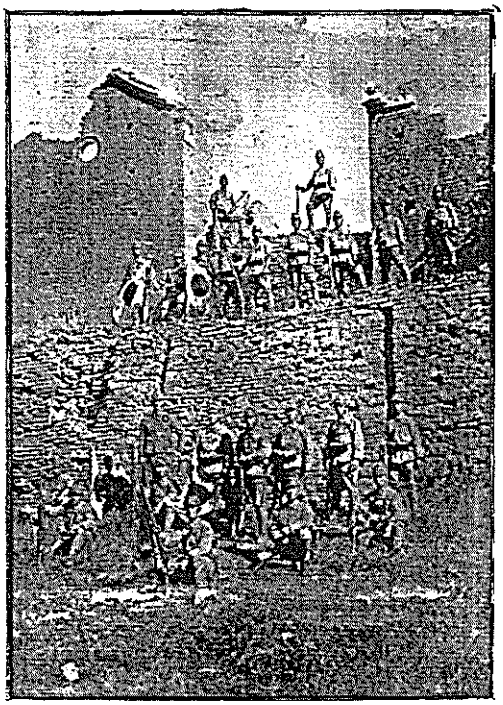
牟　封

今昔の写真集

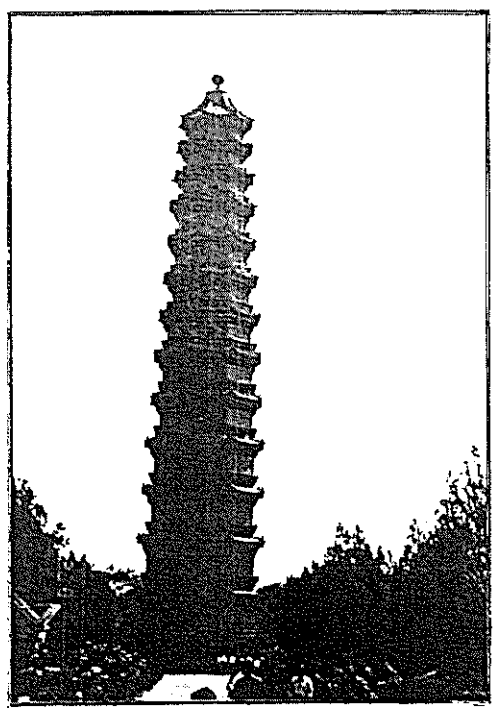
平成７年９月

寺　前　信　次

中牟城外の廟高地（占領当時）



開　封　の　鉄　塔



戦後５０年目の中牟城を訪ねて（９月２２日）

中国では盧溝橋事件記念日の７月７日前後から、抗日戦争勝利５０周年記念日の９月３日にかけて、中国の各新聞は連日大きなスペースを割いて特集を組み、テレビも毎晩のように抗日映画を放送して、日本軍の残虐さを印象付けていた。

戦後５０周年を記念した中国の抗日戦争のこのキャンペーンは、予想を超えた激しさだったと日本の外務省関係者は述べている。（私も開封のガイドから直接聞いた）中国当局の目的は「愛国主義の教育」と「国内向けの側面」を強調しているが、日本の政界をにらんだ牽制の狙いもあったと思われる。

海外に中国事情を紹介する週刊誌、北京週報の８月１４日の英語版では、「ＪＡＰ」という日本人の「蔑称」が繰り返して使われている。公的な刊行物でこれだけあからさまに蔑称が使用されるのは異例なことで、日本の侵略者を指す「日本鬼子」などの表現が頻繁に見えていた。

戦後これまで１６回も訪中した私には、このような中国の変貌を見たい一面もあったが、渺渺とした我が懐は、血を以て血を洗った遥か彼方の「中牟の古戦場」に詣でることであり、亡き戦友の御霊を弔いたかったからである。

中国・儒教の経典の「礼記」（ﾗｲｷ）に「狐死首丘」という言葉がある。狐は死ぬ時には自分が棲んでいた丘の方に首を向けるという意味で、畜生でさえ故郷に恋着を覚えるのである。まして人間が回帰熱にかかったように、激戦場の跡をこの世の見納めに、一目みたいという「帰心」が湧くのは極く自然なことであった。

「老與病相仍」、老いと病とが一つになって相仍（ﾖ）ってきた現在、戦後５０年の節目の時を失うべからずと青春時代を追憶しながら、おおいなる大陸の大地に引き付けられて去る９月２２日、戦友が鬼哭啾啾として眠る中牟の城趾を訪れた。

殷殷たる砲声に神経を磨り減らし、連日連夜、鉋（ｶﾝﾅ）で背骨が削られるような思いを覚えた中牟は今は昔の跡形もなく、些かの痕跡をも留めずに「寿山福海」というような大発展を遂げていた。

物は変って星は移り、幾度の秋を経たであろうかと眺めた中牟詣での旅行記は、本１１月１２日の中隊慰霊祭・戦友会には間に合わず、今ここに取り敢えず写真集を送ることにした。甘を分かち苦を供にし戦旅の枕を同じうした戦友諸兄に状況を伝えるのは、毎日のように黄河に沈む太陽を見送り、白光の月の出を待っていた亡き英霊の御霊を偲んで頂きたいからである。

中牟へ単独行動した際に２泊した「開封」もまた大躍進を遂げ、竜亭や鉄塔の変貌ばかりでなく城壁の内外には高層建築が櫛比し、輪奐の美（ﾘﾝｶﾝ、高大で壮麗な建築美）を備えて殷盛を極め、金城湯池の栄華の都は古い宋都を彷彿させていた。

時間がなく訪問できなかつた「朱仙鎮」は今は開封市に属し、背中に尽忠報国の四文字を黥（ｲﾚｽﾞﾐ）していた宋の忠臣「岳飛」を祀る「岳廟」が新築され、杭州の岳王廟と同じく秦檜夫妻と四人の像（岳飛を陥れた者たち）が、跪いて謝っている像もあると言う。（詳しくは紀行文に記述したい）

古代の四大鎮の一つだった朱仙鎮は未だ昔の風情を残し、開封のガイドの焦占有氏の言によると、鎮の中心の繁華街には味覚の軽食店もあり、一番人気のあるのは上等のお茶や香辛料につける豆腐干だと言うことである。

中　牟

９月２１日、中原会戦で黄河北岸を快進撃した中隊が配属された、佐久間騎兵旅団が駐屯していた「商邱」から西進したバスは、開封の南関街に新設された片道３車線の街道を西に進み、全く一変した西南角と南門の中間に開設された迎賓路を右折した。そこには驚嘆するような栄華な世界が展開し、開封は隔世の感が充満していた。

延々と高層建築が林立し、別世界のように美しく城内西南に広がる「包公湖」は私の記憶にはなく、その湖畔に建つていたホテルは「開封中国国際旅行社」が経営する「東京賓館」で、今日はこのホテルに旅装を解くことになった。

東京賓館［中国五代時代の梁国は開封に都して東京（ﾄﾝｷﾝ）と称した］に隣接した同社経営のレストランでの夕食の時、同社副社長の「邵珍女史」がわざわざ私に挨拶に見えた。

日本を出発前に旅行社を通じ、中牟へ単独行動するためにハイヤと通訳を依頼していたところ、快く副社長自らが通訳を引き受けた挨拶で、中牟行が確実となって心中は欣喜雀躍という悦びであった。但し県知事（中牟人民政府長）に面会出来るかは今のところ不明だと伝えたが、肩書きのない私の身分では致し方のない事であった。

３５師団が開封地区を占領していたことは、副社長も抗日戦争のテレビ画面を見て承知していた。そうすると中牟の守備隊長が私であったことも、あるいは認識しての通訳承諾かと一瞬ながら稍々緊張した。

翌２２日の午後１時半にホテルに迎えに来ると言うことで、午前中はツアーの一員として行動することになり、先ず開封北方約１０㌔の黄河を望む「柳園口」と、鉄塔の他は殆ど新築された広大な「鉄塔公園」を観光した。

約束の通り定刻の午後１時半に副社長の邵珍女史がロビーに出迎えてくれた。是非とも観光名所として作られた「宋都御街」だけは見たいと希望すると、快諾して車は市内を北上して竜亭に向かい、柳家湖と潘家湖の手前に広がる宋都御街をカメラに収めた。これらは「開封」の写真集に掲載したい。

開封を離れたハイヤは進路を西に向けたものの、夢ではないかと思うように地形はすっかり変貌し、見覚えは確かだと思っていた道路も、いくら記憶の糸をたぐっても思い出すことはできない。車は悠久の蒼天に真綿のような白雲が点々と浮遊する中を、一直線に伸びる舗装道路をまっしぐらに快走した。

坦々として砥石のように平らな中牟街道は深閑として人影は少なく、時世は移り変わって農村地帯は黄金の絨毯を敷きつめたように稲穂が実り、収穫は満点だと豊年を祝う光景は、胡蝶の夢を見るような驚きの景観を呈していた。

街路樹が澄み切った青空に反射する輝きも亦、自己を忘れさせるような安居楽土の風光で、若い副社長と車の後部座席に坐りながら往時を語っていると、中国人の平均寿命は日本人より１０才以上も短命なことを知った。

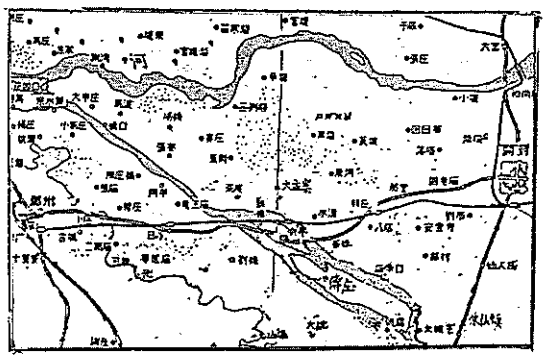
我々が占領した時には無人であった中牟城が、その後、廃墟となったことを知っている古老を探し出し、過去のことを尋ねたいという希望は不可能となってしまった。

開封の城外を出発して約４０分ほど経過すると新設された隴海線が視界を横切り、通訳の副社長は火力発電所の大煙突を指差して「中牟」だと告げたのである。

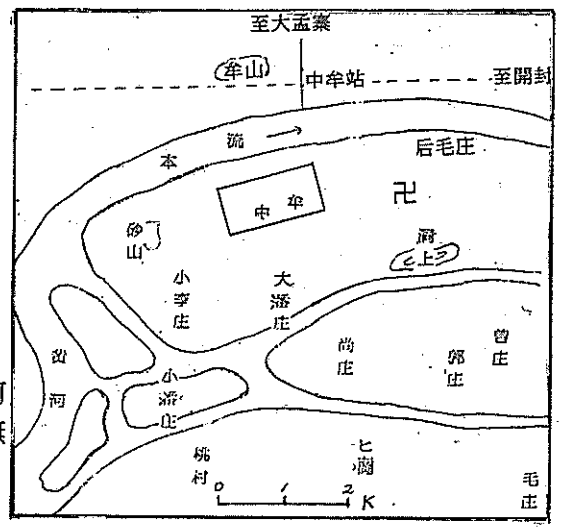
すると自然に私の体内を流れるものが芯から熱くなり出し、鼓動が早鳴って万感の思いが錯綜してきた。

次に、先ず中牟城の血闘当時の地図と、攻防戦が展開する前に撮影した写真を掲載し、そのあとに現在の中牟県の写真を掲載する。想像もできない中牟の大躍進は眼を疑うばかりで、懐かしく思い出の多い地を比較対象して頂きたい。

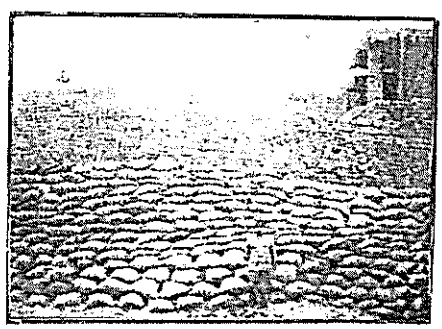
中牟の関係地図

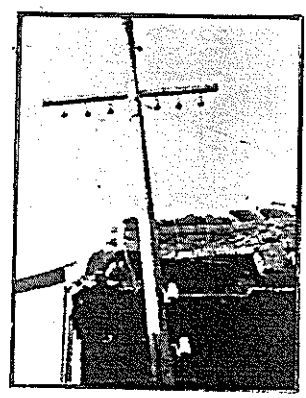


中牟城の前面図



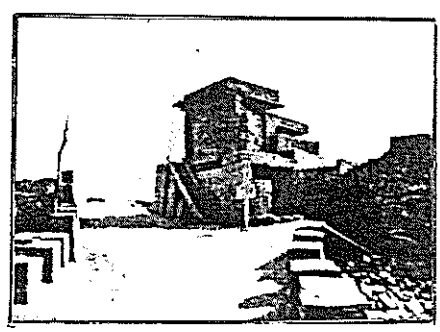
中牟城の南面の地形は草原地帯で、黄河の本流は北に流れ、大潘庄の南の川は水無川で砂漠化していた。



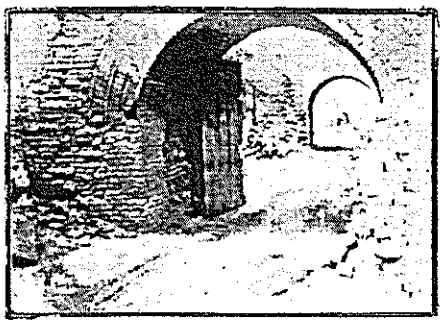


写真説明
左上から右へ

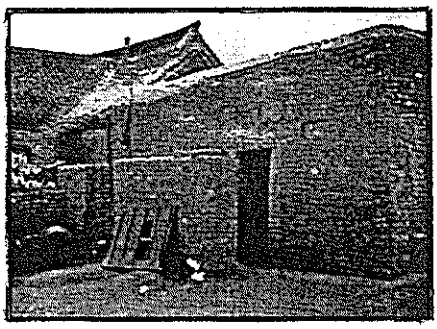
守備隊本部・土嚢を積み上げた指揮台・通信隊・指揮台と指揮塔・指揮塔と、上り道

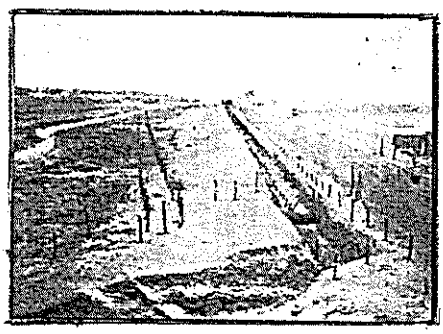


東部正面陣地

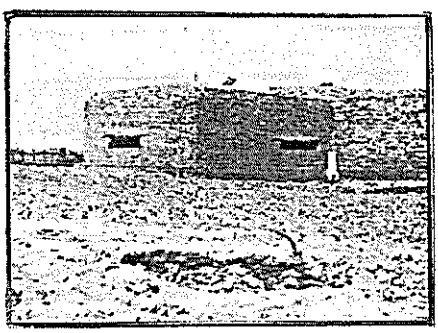


東門と
兵舎

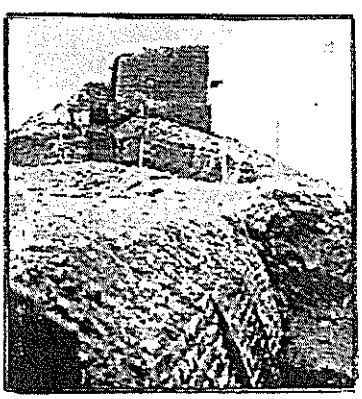


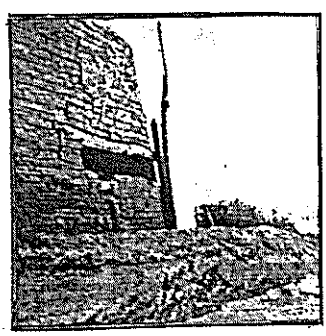


遮断壕と
鉄条網
敵の廟陣地
が見える

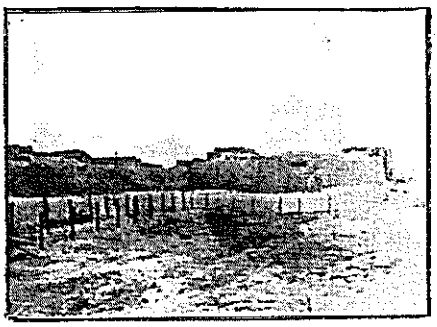


東南角陣地
東関陣地

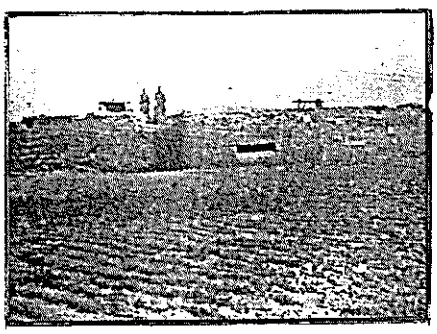




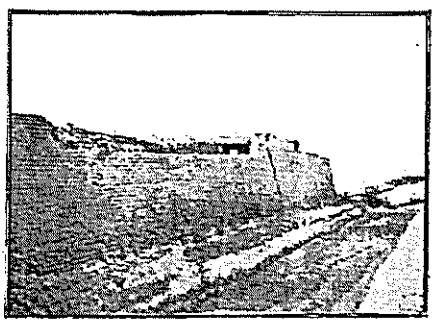
西部正面陣地

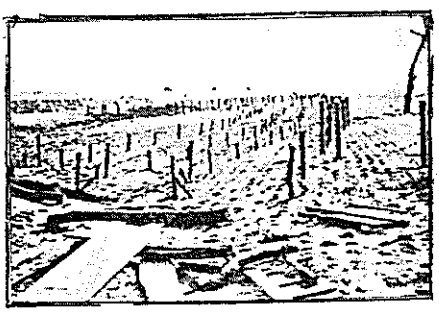


西門陣地と
鉄条網



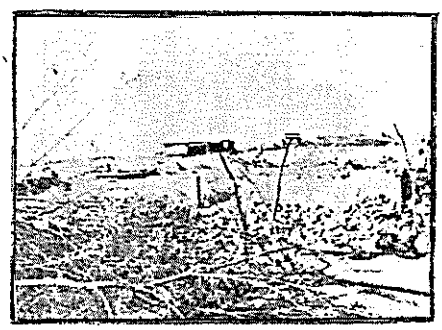
西南角陣地
と遮断壕

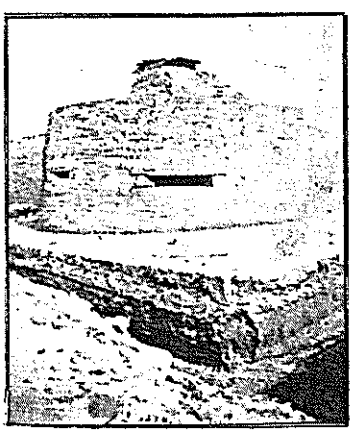




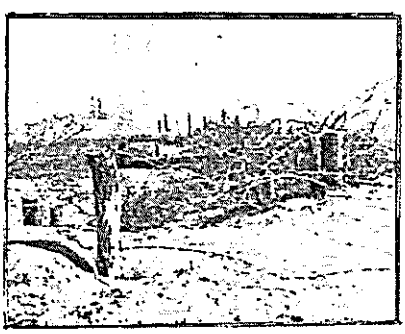
交差する
鉄条網

西関陣地

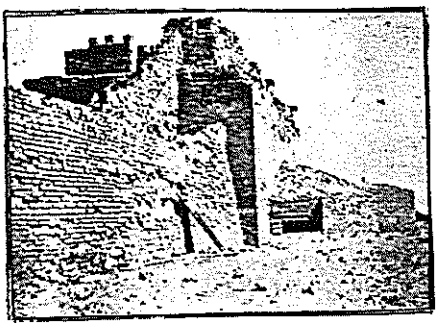




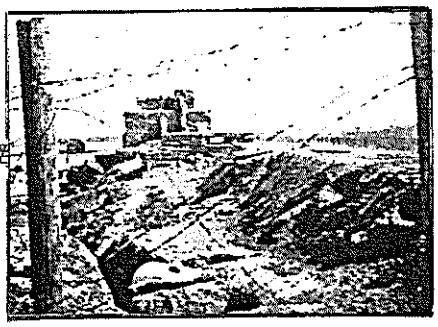
右下は鹿砦と低鉄条網

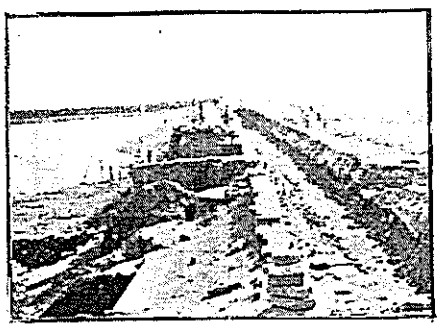


南北正面陣地

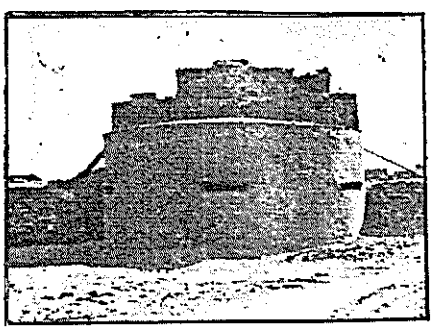


南門陣地と
交通網

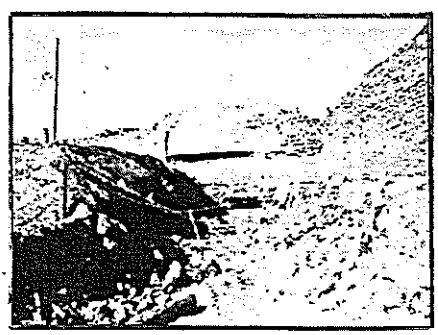




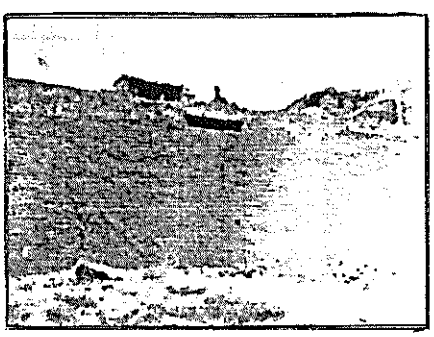
南部の城壁
と遮断壕



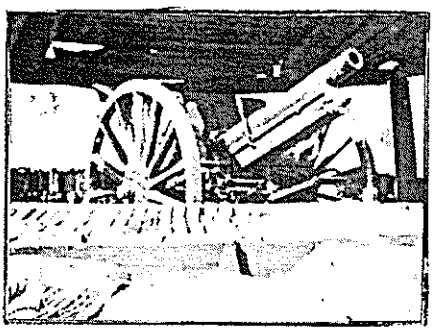
左は
北門陣地
右は
場所不明



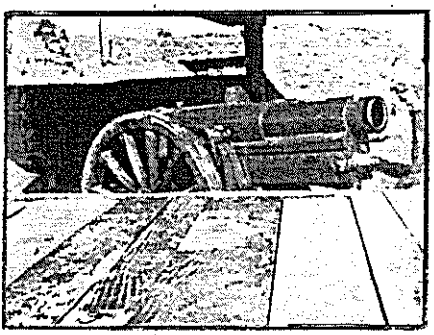
場所
不明陣地



砲工兵陣地その他



野砲陣地

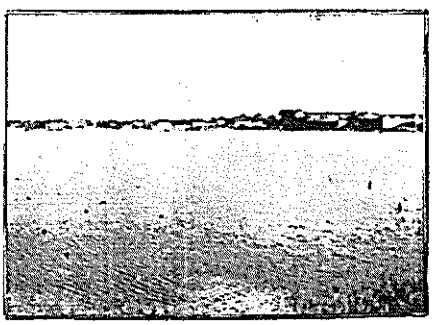


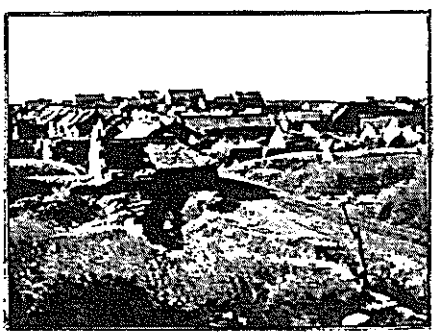
１５㎝
りゅう弾砲
陣地

渡河工兵
１５㎝
りゅう弾砲
の渡河

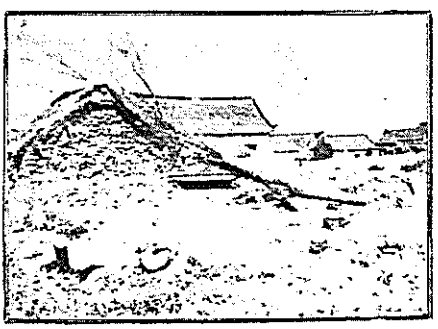
城内風景と

城内陣地



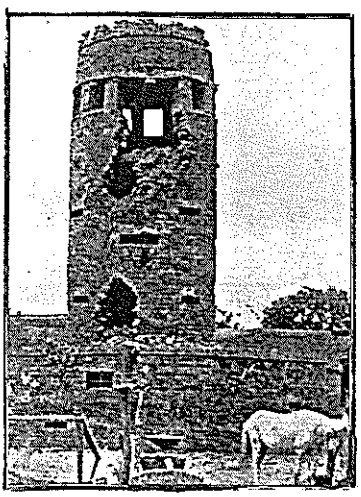


場所
不明陣地



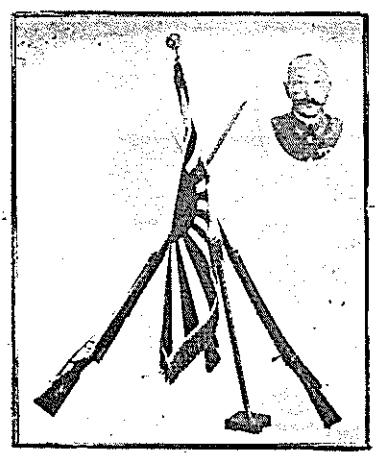
后毛庄陣地その他

后毛庄陣地のトーチカ
黄河に架る通信線
中牟との交通壕



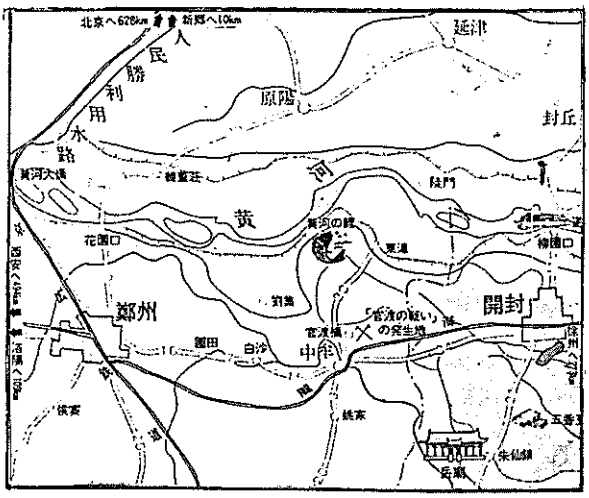
左は傅庄分遣隊の
望楼

右は朱仙鎮に駐屯
したときの思い出
の景観



左は軍旗と
湯口聯隊長

車が中牟の街に接近するにつれて私の眼光は一木一草も見落としてはならないと、自然に人を射るように鋭くなってきた。１４年前に訪れた時に見た旧黄河は用水化していたが、しかし農地改良が著しい今では灌漑用水が縦横無尽に新設され、水の色は黄河の色と同じで、輝く稲田の黄色もまた碧空の果てまで伸びていた。（右図は現在の中牟周辺図）



市街のすぐ手前に有名な「官渡の戦い」（右図参照）の古戦場が名所旧跡として再建されいた。農村地帯の中牟も観光地としての第一歩を踏み出し、発展を期していたのは喜ばしいことである。

そこを通過するとすぐ市街地であった。薄氷を履むような暴虎馮河の中牟は忘れようとしても忘れられず、鮮やかに瞼の裏に刻み込まれているあの凄惨な光景が、走馬灯のように我が脳裏の中を走っていた。

頬を紅潮させながらフロントガラスに写る街を凝視すると、彼我の巨弾の雨が降った阿鼻叫喚の巷は極楽浄土の曼荼羅のように変貌し、高層建築の輪奐の美が建ち並ぶ光景は想像もできない別の世界であった。

田舎街に過ぎなかった１４年前とも全く様相が変容し、すっかり都会化して昔の片鱗も残さない市内を、驚天動地の思いで通過した。車は中牟県人民政府の門をくぐり、美しく植栽された庁舎の広場を進んで正面玄関で停車した。

通訳の邵珍女史は県庁の人と交渉するため、私を車中に残して庁舎内に入っていった。しかし１０分経過しても戻ってこない。

思い余った私は車を降り、表情を強張らせて素早く四方を拝礼した。それは仰々しい慰霊は出来ないと前もって考えていた行動で、粒々辛苦して築城した古城を彷彿として瞼に浮かべながら、戦後５０年目の節目に当たり慰霊に来たことを告げ、霊魂を慰める祭儀に替えたのであった。

（上は中牟人民政府正門と秘書課長邱鵬氏と私）

「往時悠悠浩嘆を成す」、過ぎ去った当時のことは夢のようで、私にはただ大きな嘆き悲しみとして残っていると言う心境であった。あの時に一度死んでいる私は、以後は借りた時間を生きてきた感じで、慰霊できたことに安堵の胸を撫で下ろした。

姿を現した通訳の邵珍氏の言によると、知事は重要な会議のために面会する時間はなく、代わって秘書課長が会うということで、連れられて庁舎内に入って２階の秘書室に案内された。

名刺を差し出した私は、戦時中に中牟で戦った者の一人だと自己紹介し、先ず、当時の貴地住民に対して大きな御迷惑を掛けたと、お詫びの言葉を述べた。すると秘書

長は天天如（ﾃﾝﾖｳｼﾞｮ）といった穏やかな笑みをたたえ、古い知己の如く手を差し伸べて固い握手を交わした。

中牟の発展を称賛しながら会話を続けている時、大小１０００余りの工場が建設された大発展の原因を尋ねると、彼は日本人（鹿児島県人）の資本投下のお陰だと感謝の言葉を述べた。誰が大火力発電所までも建つ中牟を想像できたであろうか。

時間が切迫したことも知らずに夢中になっていると、通訳より時間ですと告げられた。これら会話の詳しいことは「紀行文」に譲ることにして、この写真集には割愛したい。ただ残念なことは、中牟県の歴史書を要望したが未だ発刊されていないことであった。

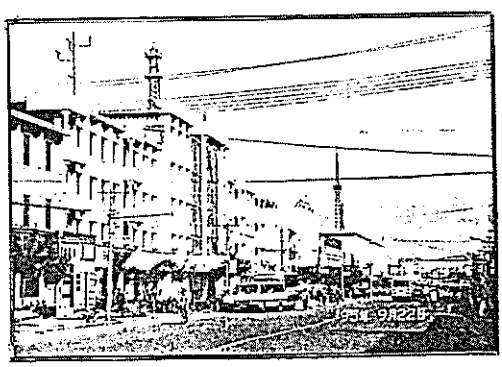
最後に私が日本から持参した戦争当時の中牟の地図を提供し、我々を悩ました敵陣の「洞上」「大潘庄」「廟」などは現存するかと質問した。すると彼はこれらの地区は市内に取り込んで市街地となり、今も地名は残っていると答えた。勿論、洞上や廟の高地は取り除いて平坦地となっていると。

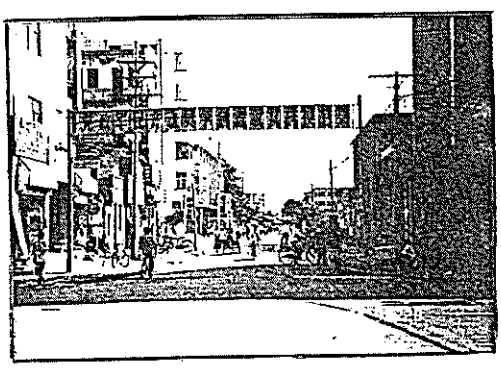
私が手土産品として差し出した石川県の特産「獅子頭」の置物が利いたのか、秘書課長は自ら現地を案内すると述べ、さっさとチャータした自動車へと足を運んだ。

早速、県庁舎（人民政府）の門前に立ち、彼と記念撮影（前頁の写真）を通訳に依頼してから、市街の中心街の写真を撮った。

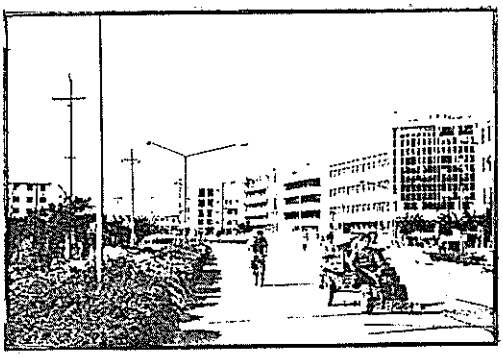
下の写真は市の中心の県庁から西方（鄭州方向）を写したもので、テレビ塔が聳えて両側には高層建築が櫛比し、明るい感じの中心街を形成していた。

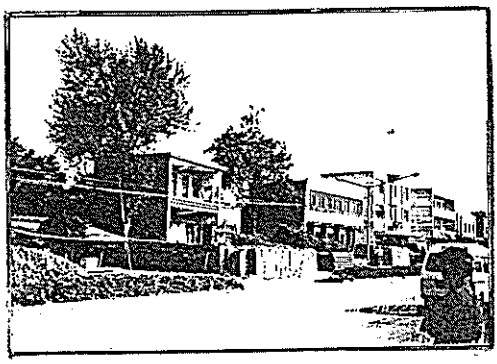
下の写真の左側は県庁舎から東方（開封方向）を、右側は中牟駅に向かう南部方向を写したもので、県庁は中心地の交差点に位置している。推察すると東西に伸びる中心街は昔の南門付近を通り、駅は１４年前に既に遥か南に移動していた。



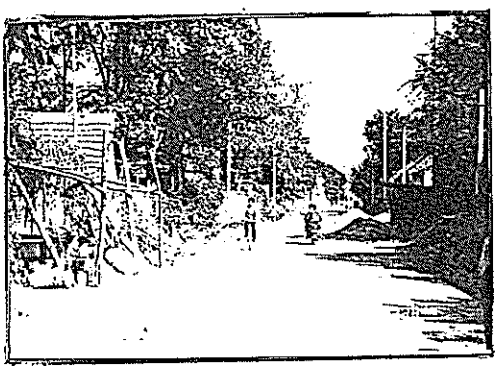


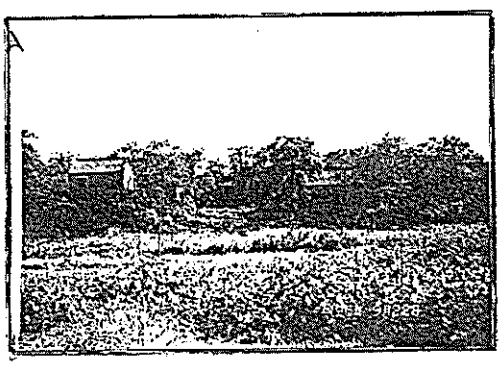
中心部の県庁から真っ直ぐに南に伸びる街路には、下の左の写真のように高層建築が続き、更に南下すると秘書課長は此処が「大潘庄」だと伝えた。
下の写真が「大潘庄」部落の跡で昔の面影は全くない。その遥か南が中牟駅である。



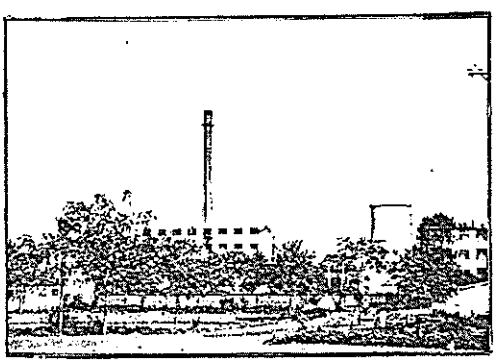


車は大潘庄の街角を左に曲がって東に進むと洞上地区であった。洞上高地の敵陣は我々には目の上の瘤のような存在で、高地の中には大洞窟が掘られていた。我が野砲、１５㎝りゅう弾砲の猛威も及ばない頑強な陣地であったことは忘れられない。
現在、その洞上高地は平坦地となり、山陰にあった部落は今も農業を営んでいたが、辺りを眺めて万歳突撃の敵前出撃が思い出された。（３頁の地図参照）
下の写真は洞上地区の一帯の変わり果てた様相である。





洞上を通り抜けて東側に出ると、そこには大火力発電所が見えていた。これが中牟発展の原動力となったようで、平坦となった廟・后毛庄方面には農家や工場が見えた。
下の写真の左側は洞上の東の大発電所、右側は廟・后毛庄付近の景観である。



極く最近の状況調査によると、中牟県の人口は６４万人、市街地区は１０万人にまで発展し、小学校４００以上、中学校３０、高校６、専門大学２（医学、農業）があり、自動車製造、製紙・加工、農産物加工などの大小工場は約１０００以上と言われている。

中国国際旅行社との中牟行は往復の時間を含めて３時間の契約のため、全地域を隈無く視察することは叶わなかった。しかし開封～鄭州間の一大工業地帯の中心を形成して北側に高速道路も走り、中牟には唯一のインターが設けられ、これからの発展は大いに期待できるようであった。

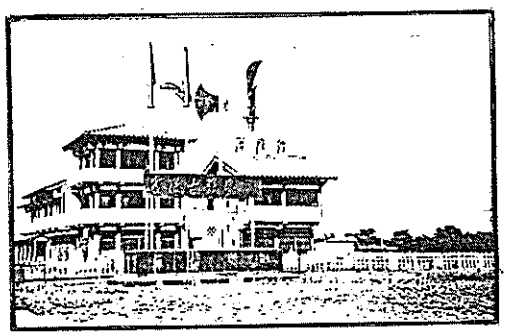
中牟の地名は、旧中牟県城の北方約２、５㎞にある「牟山」に由来していると言われている（３頁の地図参照、私は数回登った）。又、三国史にも中牟で曹操が捕らえられた史実が記録され（前回訪中時の昭和５６年の河南紀行に記述済）、由緒ある中牟の古い歴史は名高い開封の陰に隠れているようだ。

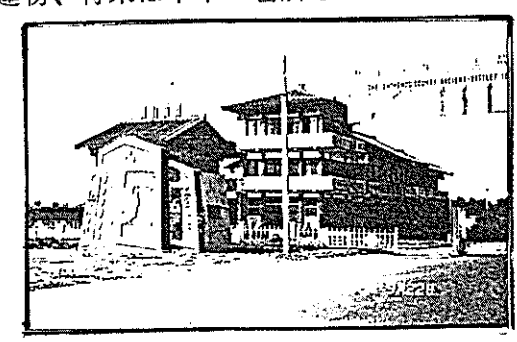
秘書課長を県庁に送り届けて帰路についた。しかし別れ去る街道は無限に続いているものの、万水千山を越えて再び訪れることないと考えると、いつまでも余韻嫋嫋として後ろ髪を引かれる思いであった。

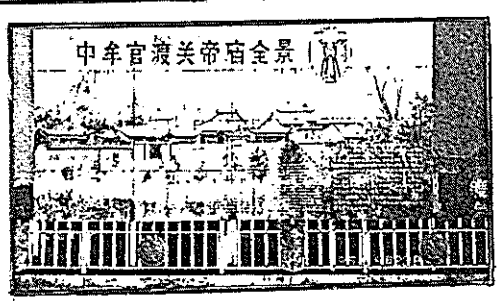
中牟を離れると直ぐの所に前記した「官渡の戦い」の古戦場を記念して、古風堂々とした２棟の建物がたつ公園が建設中であった。「中牟官渡関帝廟全景」と書いた完成図が掲げられていたが、中牟は古代から戦争に因縁のある地だと考え深く眺めていた。（関帝は関羽のことで、約束を厳守するから商業の神様として尊敬されている）

「官渡の戦い」は三国史の中でも有名な戦いである。河北に覇をとなえていた「袁紹」と三国史の主人公の一人の「曹操」とが、西暦２００年（献帝の建安５年）１０月に中牟県の官渡で戦い、袁紹は大敗して憤死している。この天下分け目の戦いは、曹操とっては生涯に於ける最も輝かしい戦果をおさめた戦いであった。

下の写真は官渡の戦いの古戦場に建設中の建物、将来は中牟の名所となるだろう。







開　　封

現在の開封は河南省の直轄市（省都は鄭州）で人口は約８０万人である。旧城内は竜亭、鉄塔、相国寺などの名所古跡が存在するために個々は改築されたが、その他は全般的には昔の面影を留めている。しかし時計台のあった鼓楼は１４年前の訪問時には既に除去され、今も中心の広場として殷賑を極めていた。

開封の大変化は城外地区で、私の眺めた南門地区には百貨店、ホテル、病院、旅行社、学校などが建ち、長距離バスの発着場もできて眼を疑うような変貌ぶりであった。

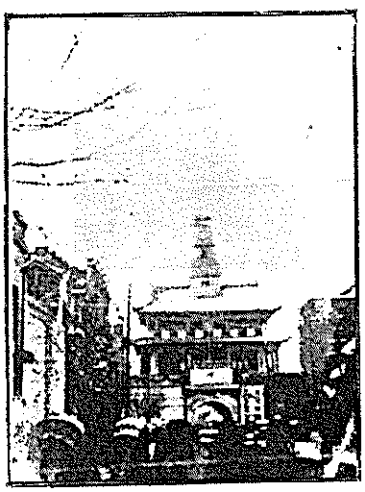
南門外から東南角、西南角方面にかけた地区と城東、城西地区には、化学、織物、電機、計器、無線、機械、農薬、トラックターなどの各種工場群が犇（ヒシ）めき合い、想像に絶する経済の大躍進の状態を呈していた。

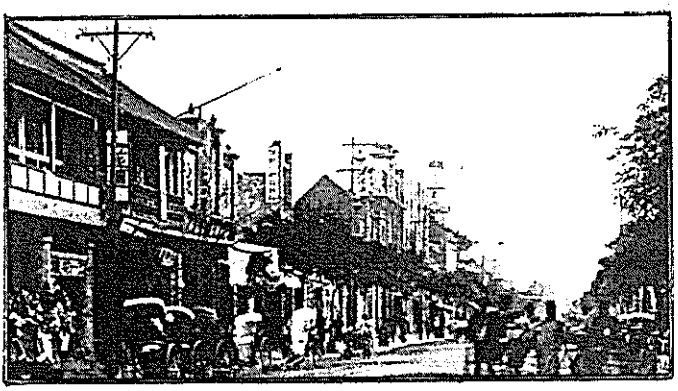
開封は中国の六大古都の一つで歴史的に有名な都である。中国最初の王朝である夏の都「老丘」は開封の直ぐ南の「陳留鎮」（私が所属した９中隊が駐屯）にあたる。春秋時代、鄭の荘公が開封に倉城を築き、「開拓封疆」（疆は境界）の意味をとって、「開封」と名付けた。

戦国時代の魏が都した「大梁」（ﾀｲﾘｮｳ)で、北周の時に名を「汴州」（ﾍﾞﾝｼｭｳ ）と改め、五代となって梁はここに都して「東京」（ﾄﾝｷﾝ）とした。晋、漢、周、北宋は皆ここに都したが、「金」（ｷﾝ）に至ってこれを「汴京」（ﾍﾞﾝｷｮｳ ）と称し、のちに「南京」と改め、明のはじめ「北京」としたが、次いで開封府と称して河南省の首府と定めたのである。

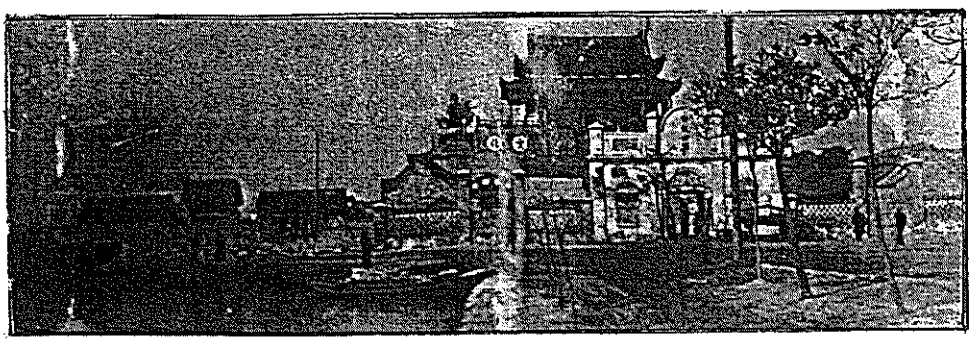
特に北宋時代は都として１６７年間つづき、中国全土の政治、経済、文化の中心地となり、商品経済が大きく発展した。当時は人口１００万以上の世界的にも最大の都市で、「汴京の富麗、天下になし」と言われた。

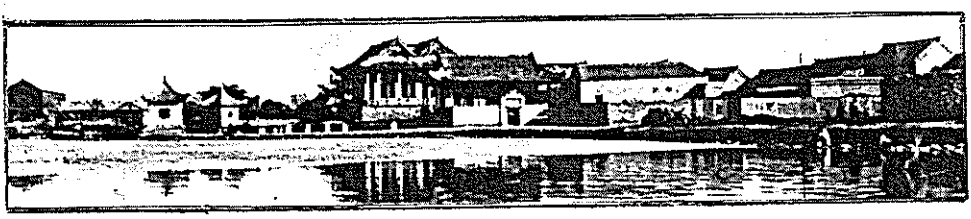
右の写真は昔の鼓楼を中心にした町並み





開　封
西北湖
鉄塔公園
鉄塔湖
河南大学
小北湖
西門
小西門
西南門
大三地
包公湖





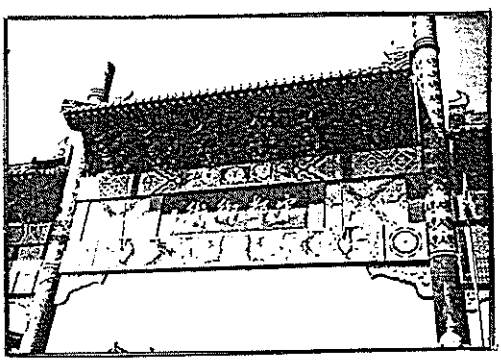
前頁の地図は現在の開封の市街図。写真の上は昔の竜亭、下は竜亭から眺めた湖畔と街の一部（昔の博物館一帯）の景観。

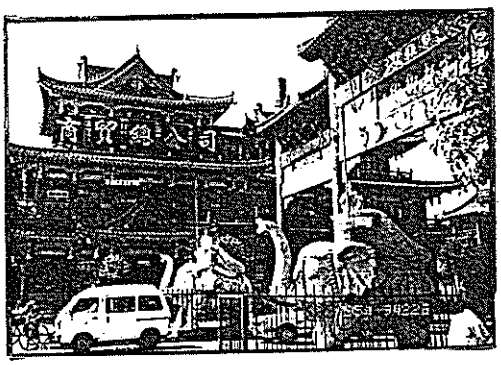
「宋都御街」

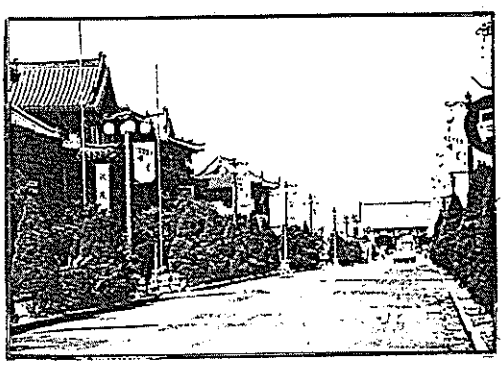
南門から竜亭に一直線に伸びる道路（現在の中山路）が、竜亭前の二つの湖水にぶつかる所に「午朝門」が新設され、その手前に１００㍍ほどの郷愁あふれる街並みができていた。この街並みを「宋都御街」と呼んでいる。

これは華やかな北宋時代の街並みを再現したもので、遠い過去と現代が交錯するような街角に立つと、文明開化の宋の時代を彷彿させるのに十分であった。

下の写真は「宋都御街」の景観で、道路の向側に見えるのは午朝門。







「竜　亭」

この一帯は宋や金時代の皇宮の跡であった。明の洪武１１年（１３８７）、太祖の朱元璋は第五子朱橚を開封に封じて周王の号を与えた。朱橚　はそこに壮大な周王府を作った。

明末、周王府は黄河の洪水に没した。清初期、河南総督の王士俊がそこに万寿宮を作り、祭日の式典の際の皇帝遥拝の場所とした。現存する大殿が万寿宮の正殿である。

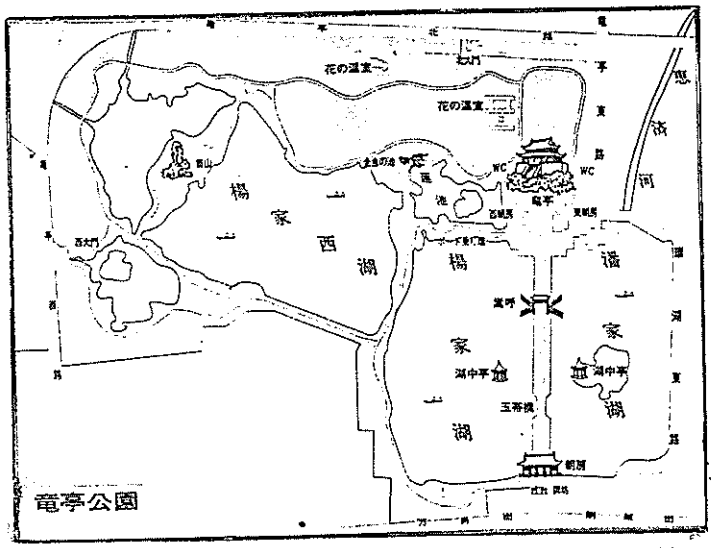
竜亭大殿は南向きで、高さ１０余㍍の煉瓦作りの台の上に建てられ、遠くから観ると天上の宮殿のように見える。大殿に上ると古都が一望され、大殿の前には潘湖と楊湖の二湖があり、その水面に竜亭が姿を写して古都らしい風情を漂わせている。

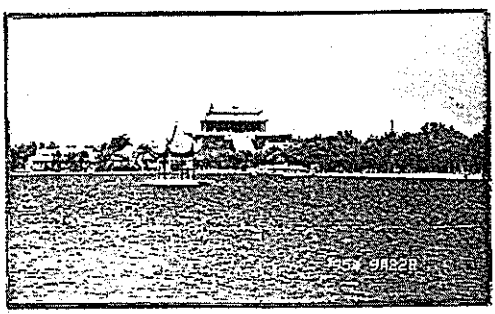
この湖水は北宋の大将楊業と潘美の邸宅跡と伝えられていることから、湖水の名が楊家湖・潘家湖と命名されたと言われる。

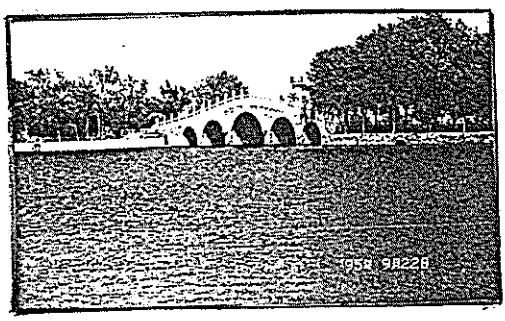
竜亭は今は竜亭公園として周囲は緑と水に囲まれ、絢爛豪華な宋都御街と相俟って、皇宮らしい景観に一新された。

大殿の黄色い瓦は王の象徴として燦然と輝き、朱塗りの色も鮮やかな竜亭は、栄華の古都の風情を再高度に表現し、人を美に陶酔する境地にさせていた。

竜亭に通じる湖上の道路には新しく朝房、玉帯橋、嵩呼（ｽｳｺ 、人民が天子の万歳を祝うところ）が作られ、大殿と呼応して美観を呈している。（上は公園の地図）

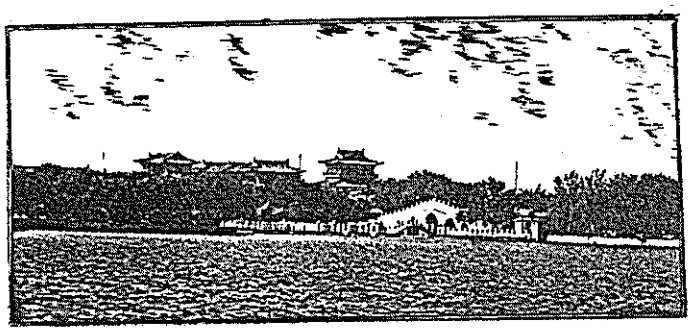






左上の写真は装いも新たな竜亭大殿

右上の写真は湖の真ん中を皇帝が歩くために造ったという道に見える、中国庭園らしい玉帯橋

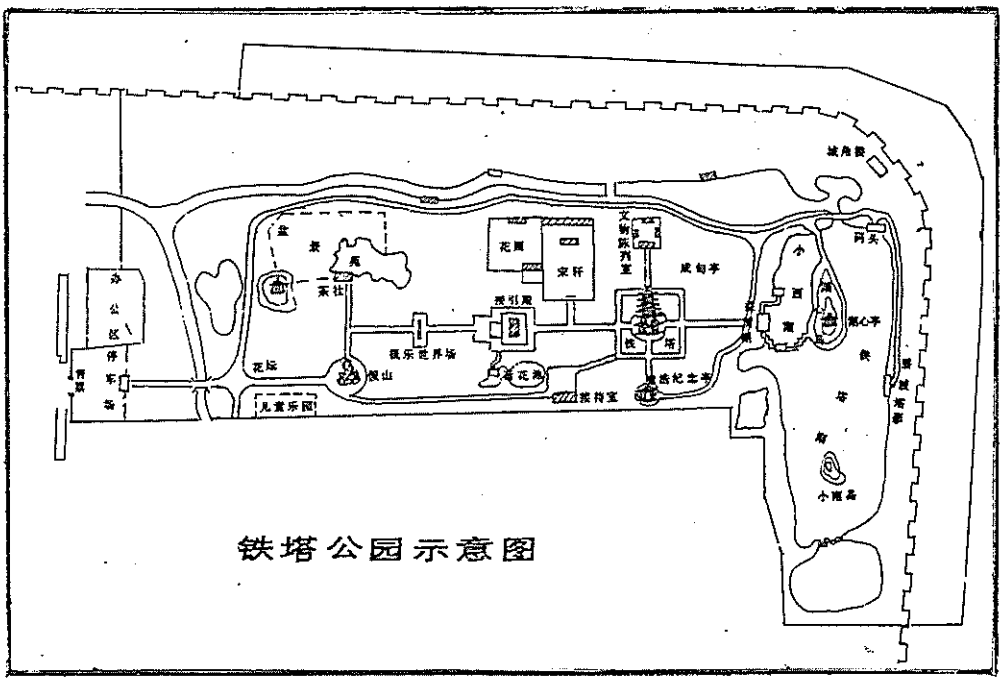


右上の写真は楊家湖上に浮かぶ竜亭大殿と玉帯橋

私は中牟行のために竜亭には登られず、湖畔を巡る道路上から望遠写真を撮っただけたが、見違えるほど景観は生き生きとして芸術性があり、郷愁を誘っていた。

大殿の両側には「配殿」が新設され、中には宋代の歴史的な文物、皇宮の立体模型、宋の皇帝や有名人の蝋人形八組が展示されている。（上の写真に見えている）

「鉄　塔」



鉄塔は現在の鉄塔公園の主体をなすもので（上の地図参照）、北宋の１０４９年に「開宝寺」の「上方院」に創建された塔である。

「開宝寺」の旧名は「独居寺」と言い、５５９年に創建された古刹である。唐の玄宗皇帝が泰山に登った時の帰路、独居寺を訪れて「封禅寺」と改名した。その後、宋の太祖の開宝３年（９７０）には年号と同じく「開宝寺」と再び改名され、北宋の歴代皇帝は祈祷のため屡々行幸していた。

北宋の靖康元年（１１２６）１２月、「金」がこの地に入城した時に開宝寺は焼き払われ、再建不能となって現在に至っている。

歴史の古い開宝寺は２４院（上方院もその一つ）があるほどの大寺院で、俗称上方寺に建つ鉄色の瑠璃塔を、後世の人は開宝寺塔、あるいは鉄塔と呼んだのである。

河南人民出版社発行の叢書によると、我々が駐屯した当時の河南大学も総べて開宝寺の敷地内に在り、鉄塔の南西に「開宝寺跡」の石碑が立っていた。

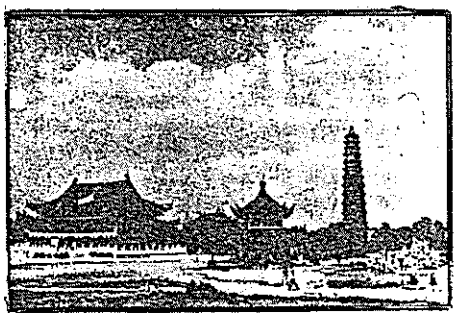
開封に残る北宋時代の唯一の建造物である鉄塔は、高さ５５、０８㍍、１３層８角柱で、正式名は開宝寺塔である。そして３８回の大地震や１９回の大暴風雨にも耐え、奇跡的にも破壊を免れた開封の象徴である。

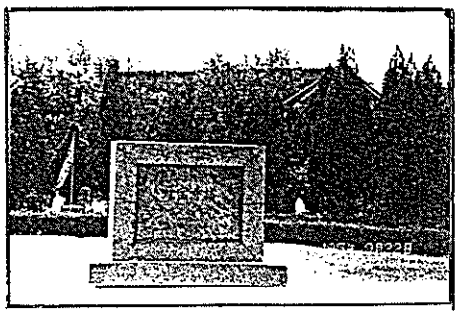
我々の記憶にある鉄塔には日本軍が砲撃した跡が歴然と残っていたが、今は完全に修復されてその跡はない。又、当時は塔内には入れなかったが、今は入場料を払って螺旋階段を上ることも可能で、塔の上から市内が一望の下に見渡すことが出来る。

今回訪れて初めて日本人僧の「成尋」が、北宋時代の１０７２年に開宝寺を訪れ、紫袈裟を賜った歴史（河南人民出版社叢書）を知り、大収穫だったと思っている。

遮るものがなかった往時と違い建物が聳え樹木が植えられた今は、高い鉄塔も遠くからは望めず、接近しなければ眼に映らない環境となった。

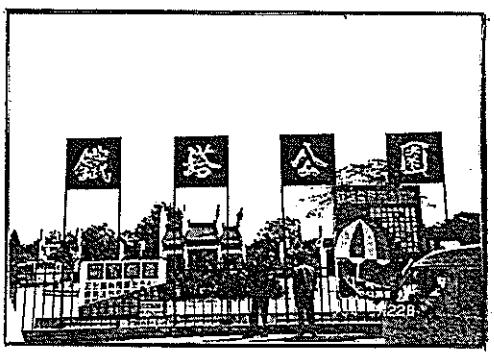
下の写真は鉄塔公園の主要部分の景観と（１７頁地図参照）、開宝寺跡の石碑。石碑の後方の建物は河南大学校舎

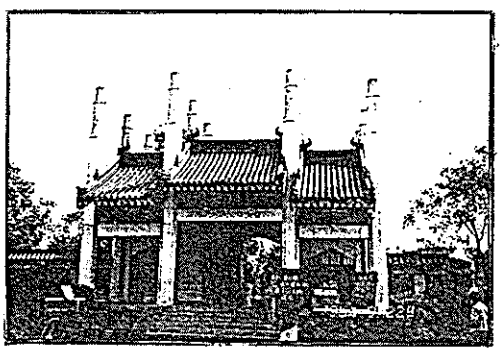


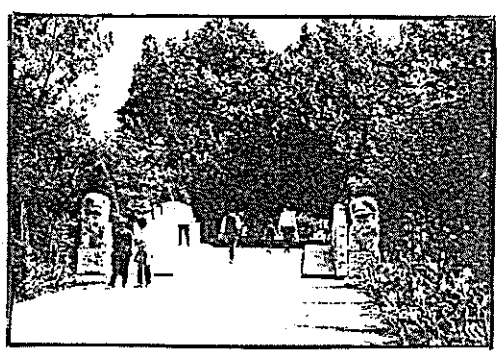


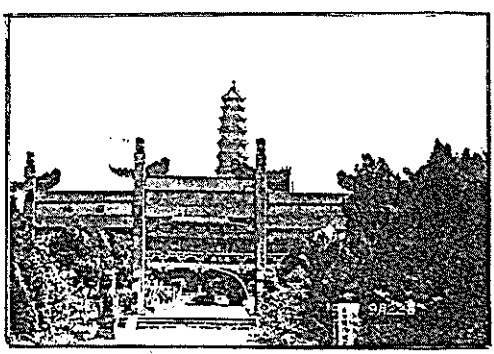
竜亭の方から進むと北門の手前が鉄塔公園の入口で（１４頁地図参照）、鉄塔公園の大看板が立っている。そこを通過すると入場券売場で、鉄塔湖という湖水の流れに架かった石橋を渡ると、築山に「天下第一の塔」と刻んだ横に長い石碑が見える。その後方の石の牌楼（やぐら門）に「極楽世界」の彫刻があり、初めて鉄塔が眼に映る。

下の写真は上記の順序の通り、鉄塔公園の看板、９本の白い柱が立つ入場券売場、白い石橋、極楽世界の石の牌楼と背後の鉄塔。









牌楼をくぐると正面は雄壮な寺院建築の「接引殿」であった。接引殿は西方浄土の極楽世界に導く接引仏（阿弥陀仏）を祀ったところで、内部には宋時代に造った銅製の仏像が安置されていた。

黄河の大水害や戦乱に巻き込まれた仏像（高さ５、１４㍍、重さ１２㌧）は、長らく鉄塔の南側の八角亭に保存されていたが、１９８６年に一般に開放されたと河南人民出版社の叢書に記録されている。

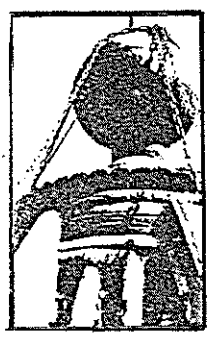
接引殿を過ぎるとその後方に「鉄塔」が毅然として聳え立ち、周囲一帯は各種の花が咲き乱れる公園となっていた。見渡す限りの景観は昔日の面影を残さず、新しく鉄塔歴史展示室などの建物が新築され、美観を添えていた。

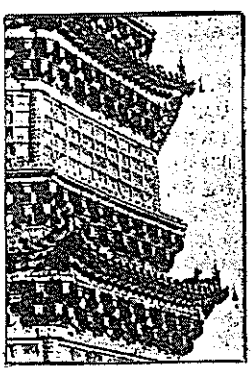
１４年前に訪れた時には疲弊そのままだつた城壁も完全に修復され、東北角の寂れ果てていた湖水も、見違えるほどの奇麗な湖水に姿を変えていた。

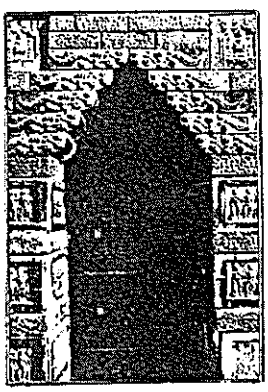
河南大学は一時河南師範大学となっていたが、今は昔のとおりの河南大学になり、鉄塔公園との境は完全に遮断され、軍隊の練兵場だった界隈も様変わりしていた。

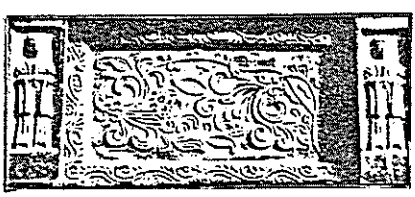
下の写真は接引殿、殿内の壁画、殿内に祀る接引仏

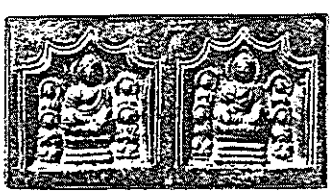
下の写真の上段は塔頂、塔身の一部、塔の上り口の門、塔内の仏像
下段は瑠璃瓦の文様の一部







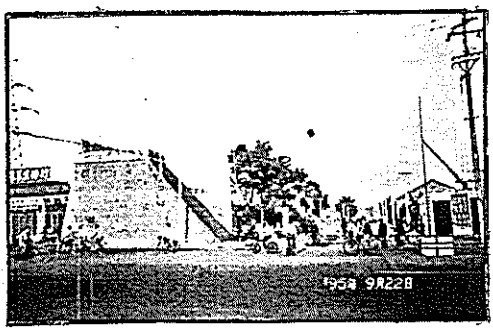




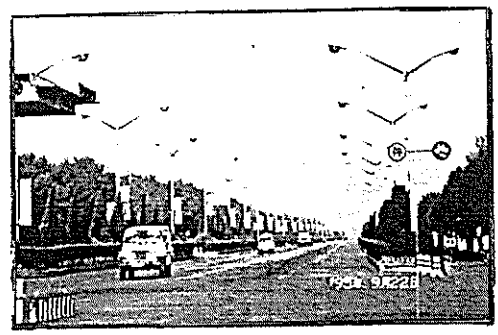
「その他」

中牟城の訪問に単独行動したため鉄塔以外の観光はできず、若干の時間を利用して開封の中心街にタクシを走らせた。下はその時に撮影した写真である。

下は迎賓路の城壁で、城門はこのようにして残されている。

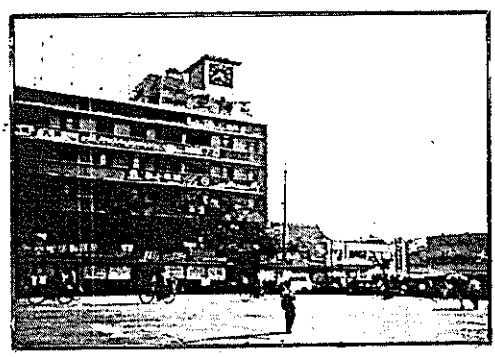


下は南門に沿って東西に走る新設道路の濱河路で、南に護城河が流れている。

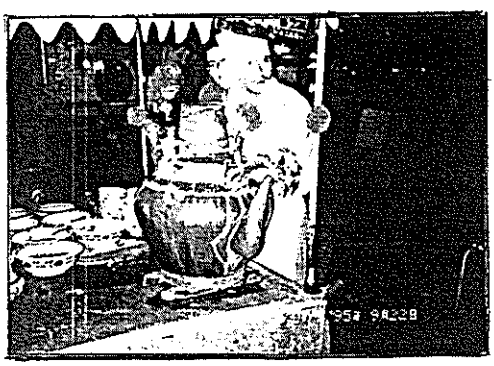


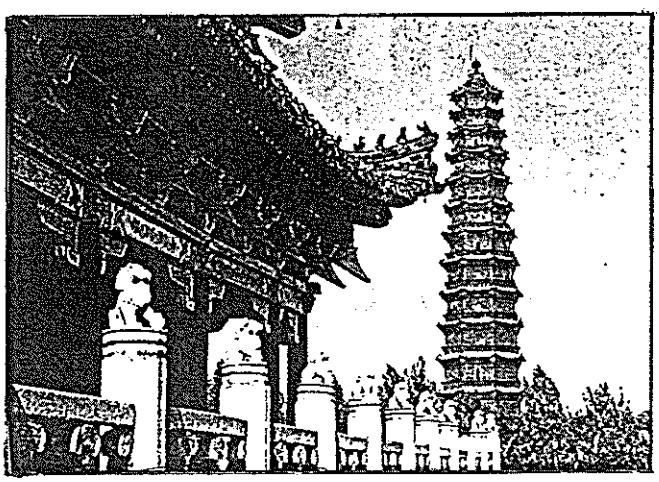
下は相国寺。５５５年に創建され、原名は建国寺で７１２年、唐の睿宗は相王から皇位を継いだことを記念して、相国寺と改めた古刹。（今のは清代）

下は鼓楼広場。往時は時計塔が聳える鼓楼が建っていたが、今は除去されて広場である。時計だけは洋式建築の屋上に見えている。



下は鼓楼広場の夜店。北宋時代は開封が中国の首都で商業も盛んであり、その頃から繁華街には夜店が出て夜通し人の絶え間がなかったと言う。今は更に盛んになって北宋時代の伝統を守り、夜店は鼓楼から書店街、馬道街、相国寺へと続いていた。



竜　亭

宋都御街より鉄塔を望む